

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720215

研究課題名(和文) 欧文資料による近代中国語音韻史研究

研究課題名(英文) Research on the Modern Phonetic System in Hubei Dialect through Western Materials

研究代表者

千葉 謙悟 (Chiba, Kengo)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：70386564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画の目的は19-20世紀湖北方言の音韻について考察することである。中国語は漢字のみで書かれるため、本研究では中国を訪れた宣教師らが残したアルファベットによる記録を用い、より確度の高い再構成を試みた。

本研究では19世紀末の状況を Ingle の Hankow Syllabary(1899)や China Review に載せられた Parker の報告から分析し、20世紀の状況については De Nino の Piccolo Vocabulario Cinese-Italiano(1925)や Landi の Piccolo Vocabulario Italiano-Cinese (1939)から解明した。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to examine the phonetic system of Hubei dialect in the 19th-20th centuries and to reconstruct them. As is generally known, Chinese is written by their logographs, therefore it is informative to use the materials recorded in alphabetical manner to analyze the phonetic system.

In this project, the situation in the late 19th century was studied through Ingle's Hankow Syllabary (1899) and a paper by Peter Parker in China Review, while that in the 20th century is discussed on some Italian materials such as De Nino's Piccolo Vocabulario Cinese-Italiano (1925) and Landi's Piccolo Vocabulario Italiano-Cinese (1939).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：中国語学 音韻論 官話 湖北方言

1. 研究開始当初の背景

近代中国語の音韻研究は現在ほぼ主要な漢文資料に対しては分析が終了しているといつてよい。しかし中国語は漢字のみで書かれるため、漢文資料に依拠するのみでは音声音韻面での詳細な通時的分析に限界がある。

近年かかる限界を超えるため注目されているのが欧文資料である。これらはラテンアルファベットで書かれているため(キリルアルファベットによる資料ももちろん存在するが)、漢文資料よりも具体的に当時の音韻・音声を把握することができると考えられる。

しかし、この種の資料が歴史音韻論の研究資料として用いられることは従来少なかった。そこで本研究では、欧文資料を用いて近200年の中国語音韻史の再構を目指す。

科研費データベースなどからでも諒解されるとおり、中国語音韻史研究は文法研究に比して量的に少ない。それらも多くは漢文資料を用いた研究であり、外国資料を用いていたとしても中国周辺の民族の言語(朝鮮語、満州語等)によるものが多い。これらの言語による資料は地理的な近さから中国文化の影響を受けやすく、表音文字を用いながらも中国語で歴史的に正しいとされてきた音(正音)をあえて記すなど、当時の現実の音を記録していないおそれがある。

その点、宣教師らによる欧文資料は中国文化の正音意識から自由であり、より当時の実態に即した音韻史を再構することができる期待される。このような欧文資料を積極的に活用することが本研究の柱であり、独創性なのである

日本における中国語学研究はこれまで近世以前あるいは現代に注意が向けられることが多く、近代中国語に関する研究は相対的に少ない状況が続いてきた。

研究分野に関して言えば通時的、共時的を問わず文法に厚く音声や音韻に手薄な状態にあるように見受けられる。

本研究はこうした研究上の空白を埋めるものと位置づけることができよう。ここから近代中国語研究のさらなる進展が見込まれる。

本研究の特色として、扱う欧文資料の広範さを挙げることができる。これまでの欧文による音韻史研究はプロテスタント宣教師 英語圏出身者による資料(以下「英

語資料」と称する)が大きな比重を占めてきた。しかしカトリック宣教師による資料はイタリア語やフランス語、あるいはラテン語によって残されていることが多い。この事実をふまえるとき、英語資料だけでは音韻史を跡づけるに十分ではないことは明らかである。非英語資料による研究には例えば古屋昭弘(1996)「17世紀ドミニコ会士ヴァロと『官話文典』」『中国文学研究』24:118-129が挙げられるものの、総じてその数は少ない。

本研究が中国語学に基礎をおきながらも効率的な成果を挙げられると期待できる要因として、研究に必要な資料が中国よりも日本に豊富に残されているという点が挙げられる。

西学(日本では洋学)の受容に関して、一斑に日本は中国よりも積極的であった。欧文資料を含めた各種西学資料を中国から大量に招来し保存してきたものが、現在に至るまで残されている。これは研究上非常に大きなアドヴァンテージを提供するものといえるだろう。

例えば欧文資料の基本中の基本ともいふべきモリソン『華英字典』やロブシャイト『英華字典』すら、中国には満足に所蔵する機関があるという情報を聞かない。

他の研究者との連絡・支援体制としては、申請者が研究キャリアを積む過程で築いてきた海外の研究者との連繫を活用できるということが挙げられる。

その成果の一つが先年ヴァティカン図書館所蔵『初学簡径』(1838)の複印を入手したことである。海外の研究者との連繫について申請者はすでに実績を挙げており、これまで利用されることの少なかった非英語資料についてもこの連絡体制を活用することによって研究対象とすることが可能である。

2. 研究の目的

本研究計画「欧文資料による近代中国語音韻史研究」の目的は、現代中国語の直接的な来源となった18-20世紀中国語の音韻音声面における実像について考察することである。

過去の研究を見るに、文法的な研究は進んでいるが音声音韻面での蓄積はいまだ不十分であるようにみえる。

周知の通り中国語は漢字のみで書かれるため、漢文資料のみに依拠しては音声

韻面での詳細な通時的分析は難しい。本研究では中国を訪れた宣教師らが残したラテンアルファベットによる記録を用いた研究を行うことにより、より確度の高い近代中国語音韻史の再構を試みる。

3. 研究の方法

本研究計画においては湖北方言の音韻史を再構することとしたい。湖北方言については主として英語資料とイタリア語資料を用いる。前者は Ingle *Hankow Syllabary*(1899)をはじめとして *China Review* に載せられた Parker や Sydenstricker の報告が利用できる。20 世紀では Grosvenor *A Colloquial English-Chinese Pocket Dictionary in the Hankow Dialect*(1925)が挙げられるだろう。

これらはまだ本格的に取り上げられていないものであるが、本研究を通じた複数の分析結果を利用して音韻変化を解明したい。などを利用し、主として英語資料から 19~20 世紀湖北方言の再構を図る。

本研究で用いることになるイタリア語資料についてもあまり知られたものではないことから適宜紹介したい。

音韻体系の再構に付随する研究には二種類ある。一つは各種資料について書誌学的な検討を加え、とりあげる文献の資料性を明確にすることである。これによって議論の説得力を高めることに留意したい。音韻分析の際、おのおのの資料がどの地域の音系を記録しているのかについては慎重に見極める必要があるからである。

音韻分析の際、おのおのの資料がどの地域の音系を記録しているのかについては慎重に見極める必要がある。例えば当該文献が Hubei Dialect(湖北方言)などと称していても、それが漢口を指すのか武昌を指すのかについては慎重に検討せねばならない。単に「湖北方言資料」をかき集めて分析し時系列上に並べるだけでは確度の高い音韻史は再構できないであろう。本研究ではそうした資料性の面にも意を用いる。

もう一つは文献の発掘である。例えば Ingle の *Hankow Syllabary* は 1899 年が初版であるが現在 1915 年の 2 版しか確認できていないため、その文献検索も並行して進めたい。また Scarborough *A Collection of Chinese Proverbs*(1875)を入手した。これは漢字の脇に湖北方言によるローマ字標音を付しているため、当時の音韻を知る資料として一定の価値を有する。

本研究の組織について。本研究は基本的に単独で遂行する。即ち具体的な作業としては、音韻分析のための資料収集、そこか

ら得られた見解を学会・シンポジウム等において公表すること、さらに論文の公刊、報告書の作成などである。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の三点に分けることができる。

第一に James Addison Ingle *The Hankow Syllabary* 漢音集字 (1899)の音系の分析を発表したことである。この発表では『漢音集字』から 19 世紀最末期の湖北方言の音系を分析した。

まず著者 Ingle について。James Addison Ingle(1867-1905) はアメリカの Maryland 州で生まれ、1891 年 11 月に聖公会 (当時の American Episcopal Church)の牧師として中国に派遣された。

来華宣教師の慣例として、上海到着後 2 年間は中国語の習得に専念するものだが、人手不足から年が明けるとすぐ漢口に着任し、牧師としての業務をこなしつつ中国語学習をスタートさせた。聖公会による布教は、武昌では比較的順調に進んでいたが対岸の漢口までは手が回っていなかったからである。

イングルは上海到着後まず上海方言を学んだようだがそれは数ヶ月にも満たず、1892 年に漢口に到着してからは湖北方言を学ぶこととなった。働きつつ一日平均 4 時間の中国語学習を続け¹、翌年の 4 月には口語でのコミュニケーションに支障を感じなくなっている。

イングルについて記す文献はいずれも彼の中国語力の高さに触れており、さらに自身の手紙からも自らの語学力に自信を持っていたことが窺える。

ただ、1892 年 6 月には体調を崩して一夏を日本で静養するなどあまり体調には恵まれなかった。1901 年には聖公会漢口教区の初代主教(bishop)に選出され教勢の拡大に努めたものの、体調の悪化と激務により 1905 年 12 月に亡くなっている。わずか 38 歳であった。

次いで 20 世紀の漢口方言の音韻史について。漢口方言の音韻史については簡略ながら朱建頌(1992)《武汉方言研究》武汉出版社、陈娟(2007)《关于汉口方言的历史演变》、《文学教育》第 5 期 p.150 に記述がある。いずれも歴史資料として『漢音集字』に触れているが、その音韻体系の全体像を

¹ “My studies go on as before, ten hours a week with my teacher, eight with the deacons, three with the night-school, eight with the choir-boys, so that I average four hours each week-day with my Chinese.”(May 8, 1892), in Jeffreys(1913:77)

明らかにしたものではなく断片的な記述に留まる。また黄群建(1997)《湖北方言文献疏证》武汉湖北教育出版社は『漢音集字』を再構音によって再配列したものを排印するが、その再構音は朱(1992)に由来する。

しかし朱(1992)にあっても黄(1997)にあっても、『漢音集字』のローマ字標音と再構音との関係は示されていない。従って本稿では『漢音集字』に全面的な分析を施し、その音韻体系を再構して特徴的な点を明らかにした。

『漢音集字』は湖北方言の中でも漢口方言を反映すると考えられるが、『湖北方言調査報告』(1948, ただし漢口の調査年は1936)においてはすでに見られない特徴を見いだすことができた。

例えば通撰入声だけではなく遇撰の一部にも-ung と標音されるような音節があったり、果撰疑母字に合口の音節が出現したり、「熱」を rao と標音したりするような点である。

また『漢音集字』における n- と l- の標音状況および成都方言を記した『西蜀方言』(1900)から、西南官話における n- と l- の合流過程について一つの仮説を提示した。

すなわち l から鼻音化した l を経て n に到るという変化である。これについては軟口蓋鼻音声母の一部が歯音鼻音を経てゼ口声母化しつつあるように見える (= 仮説と逆行する変化) という指摘もあり、さらなる検討を要することとなった。

声調は陰平、陽平、上声、去声、入声の五種類が存在した。『漢音集字』においては入声を独立させている。ただし陽平と入声の混同はすでに始まっていることが序文からうかがえる。五つの声調の調値はそれぞれ陰平 45、陽平/入声 11、上声 42、去声 35 と推定される。

なお、現代音でも調値に基本的な変化はない。朱(1992:4)によれば陰平 55; 陽平 213; 上声 42; 去声 35 である。したがって Parker が漢口方言を記述した1870年代から Ingle や『湖北方言調査報告』を経て現代まで、基本的に調値は安定しているといつてよいだろう。報告のある漢語諸方言の多くが近代になって声韻調を大きく変化させている中で、武漢方言の声調に見えるこのような一種の「安定性」は注目すべきものであろう。

『漢音集字』を中心に音系の分析を試みたが、他にも湖北方言の欧文資料として Scarborough(1875)や Grosvenor(1925)などが存在するので、これらを利用してさらに確度の高い音韻史の再構を目指したい。

本研究に基づく湖北方言の再構音は以下

の通りである。なお()内のローマ字は『漢音集字』の標音、[]内の字はその声母を有する字。

【声母】

p(p)[貝棒並]	p'(p')[盤瓶泡]
m(m)[妙民滅]	f(f)[法豊伏]
t(t)[刀典東]	t'(t')[統鉄図]
n(n)[尿釀]	l(l)[腦難落]
ts(ts)[状贊昨]	ts'(ts')[存池唱]
s(s)[設孫松]	z(z)[任肉銳]
te(ch)[肌旧薦]	te'(ch')[口群春]
e(hs)[相純邪]	k(k)[歌高貫]
k'(k')[寬克恐]	ŋ(ng)[厄翁岩]
x(h)[黒黄蟹]	(-)[医阿偽]

【韻母】

i(z)[時持支]	a(a)[巴馬柘]
o(o)[多摩模]	ɤ(ê)[者惹蛇]
i(i)[梨帝携]	ia(ia/ya)[霞牙茄]
ie(ie/yie)[也写借]	u(u/wu)[布故五]
ua(ua/wa)[画誇蛙]	uo(wo)[臥我詎]
y(ü/yü)[諸許麩]	ye(ue)[靴鞞]
ə(êr)[而耳二]	ai(ai)[待來岩]
ei(ei)[卑閉最]	au(ao)[刀饒矛]
əu(°o)[偶楚土]	iau[叫揺謬]
iəu[油流九]	uai(uai/wai)[怪外懷]
uei(uei/üei/wei)[銳為葵]	
an(an)[南染丹]	ən(°n)[針根膨]
ien(ien/yen)[間梟炎]	
in(in/yin)[林親明]	
uan (uan/wan)[川晚緩]	
uən(u°n /w°n)[温魂横]	
yen(uen/yüen)[願軟懸]	
yin(uin/yüin)[孕君永]	
aŋ(ang)[忙方項]	uŋ(ung)[母孟莫弘没蒙木]
iaŋ(iang/yang)[相強講]	
iuŋ(iung/yung)[容凶兇]	
uaŋ(uang/wang)[王皇双]	
iʔ(z)[汁室直]	aʔ(a/ah)[答癸八]

oʔ(o)[合剝割] ɣʔ(ê/êh)[刻撰百]
iʔ(i)[筆力昔] iaʔ(ia/ya)[狹轄压]
ieʔ(ie/ieh)[接列血]
uʔ(u/wu)[骨物卜]
uaʔ(ua/wa)[猾凹襪]uoʔ[uo/wo][闕愕握]
urʔ(uêh)[鑊国或]
yʔ(ü/yü)[入屈役] yeʔ(ue/yüeh)[月決掘]
yoʔ(üoh)[搦虐略]
əʔ(êr)[日相駟] aoʔ(ao)[熱蕪<才栗>]
əuʔ(°o)[突読戮] iəuʔ(i°o /y°o)[粟玉欲]

【声調】

上平 45、下平・入声 11、上声 42、去声 35

第二にイタリア語資料を用いて 20 世紀湖北方言の音韻を分析したことである。すでに 19 世紀中葉のイタリア語資料『三字経』(1869)を分析しているが、今回の研究による第一の成果と対照させることで湖北方言音韻史についての時間的な幅と分析の精度を向上させることを目的としている。利用した資料は De Nino Piccolo *Vocabulario Cinese-Italiano*(1925) や Landi Piccolo *Vocabulario Italiano-Cinese*(1939)である。いずれもイタリア人による中国語-イタリア語の対訳辞書であり、漢字にふられたローマ字標音から音韻を分析する。これについての報告は平成 26 年度中に行うことを目指している。

第三に Scabourough の *A Collection of Chinese Proverbs*(1875)を入手したことである。これは湖北でよく聞かれる中国語のことわざや成語を集成したもので、おのおのの漢字の脇に湖北方言によるローマ字標音を付し、全体の英訳を与えるものである。

A Collection of Chinese Proverbs は当時の湖北方言の音韻を知る資料として一定の価値を有すると思われるため、これが反映する音系の分析にも着手した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

千葉謙悟(2014)「『漢音集字』と 19 世紀湖北方言」『中国語学研究 開編』33, 査読有(投稿中)

〔学会発表〕(計 1 件)

千葉謙悟(2013)「『漢音集字』(1899)と近代湖北方言」中国近世語学会秋期研究集会、

12 月 7 日、愛知大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

千葉 謙悟(CHIBA, Kengo)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号: 70386564